

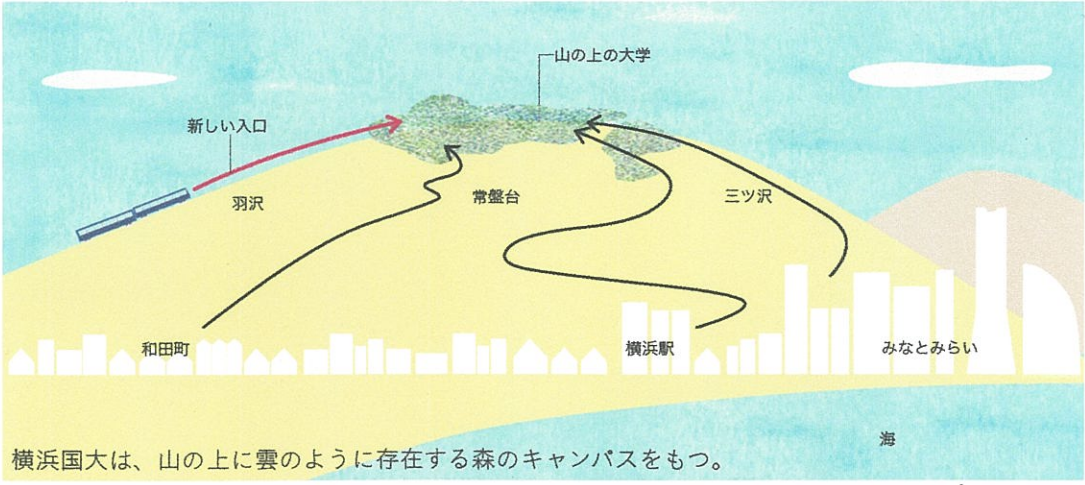
森が出迎えるキャンパス

横浜国立大学常盤台キャンパスは横浜の中心地から離れた場所にあります。そのために様々な方角からアクセス可能です。今回、羽沢横浜国大駅からのアプローチが加わることで、「山の上の大学」として、キャンパス内外で広く展開する研究活動を見据え、東京や横浜に対し中立性のあるイメージを確立できるのではないかと考えます。緑がもくもくと生い茂る今のキャンパスは、まるで「雲のように柔らかな輪郭を持つ、ひとつの環境」であると捉えます。

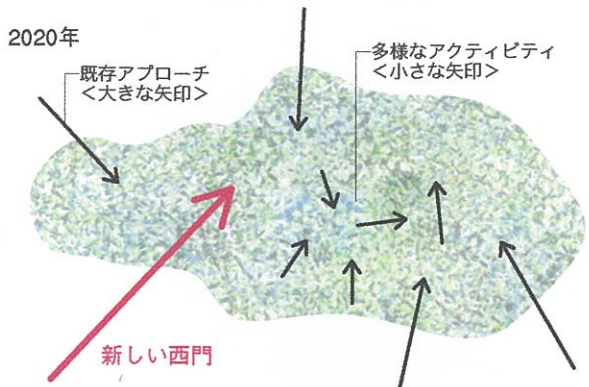
キャンパス移転から約50年が経ち、宮脇教授による潜在植生理論による木々の“群れ”と、河合教授による印象的な立体造形による建築の“群れ”とが対等な印象を放ち、融合し、キャンパス経験が「緑と建築の連なりとシークエンス」が強いアイデンティティになっています。

一方で、今回計画の対象となる西門ロータリー・第二食堂エリア等は、この二つの個性が不足し、現状は町の裏側に訪れた時のような、やや殺風景な状況と言えます。そこで、①このエリアの緑化を促進し、②国大西バス停が隣接する第二食堂の建築をランドマーク化し、アイデンティティを補完します。また、西門だけでなく、現存するすべての門および周辺を同様に見直し、緑の景観を整えてゆけると良いと考えます。キャンパス内の「森とランドマーク」を再構成し、アプローチ部分（＝門）は「森の玄関口」としてより印象的に設え、キャンパスのさまざまなシーンの移ろいが感じられ、誰でも散策して楽しめる環境をつくることができると良いと考えます。

■横浜国大らしいキャンパス環境形成

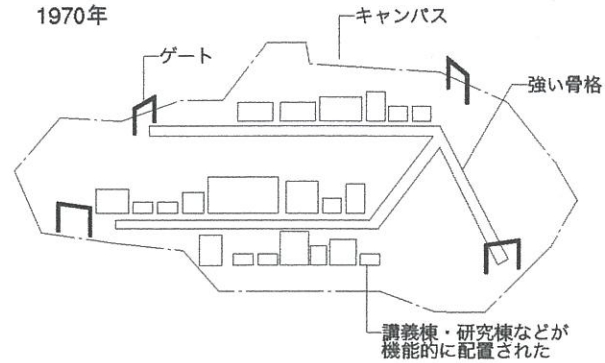


■キャンパスの環境変化に合わせた再解釈



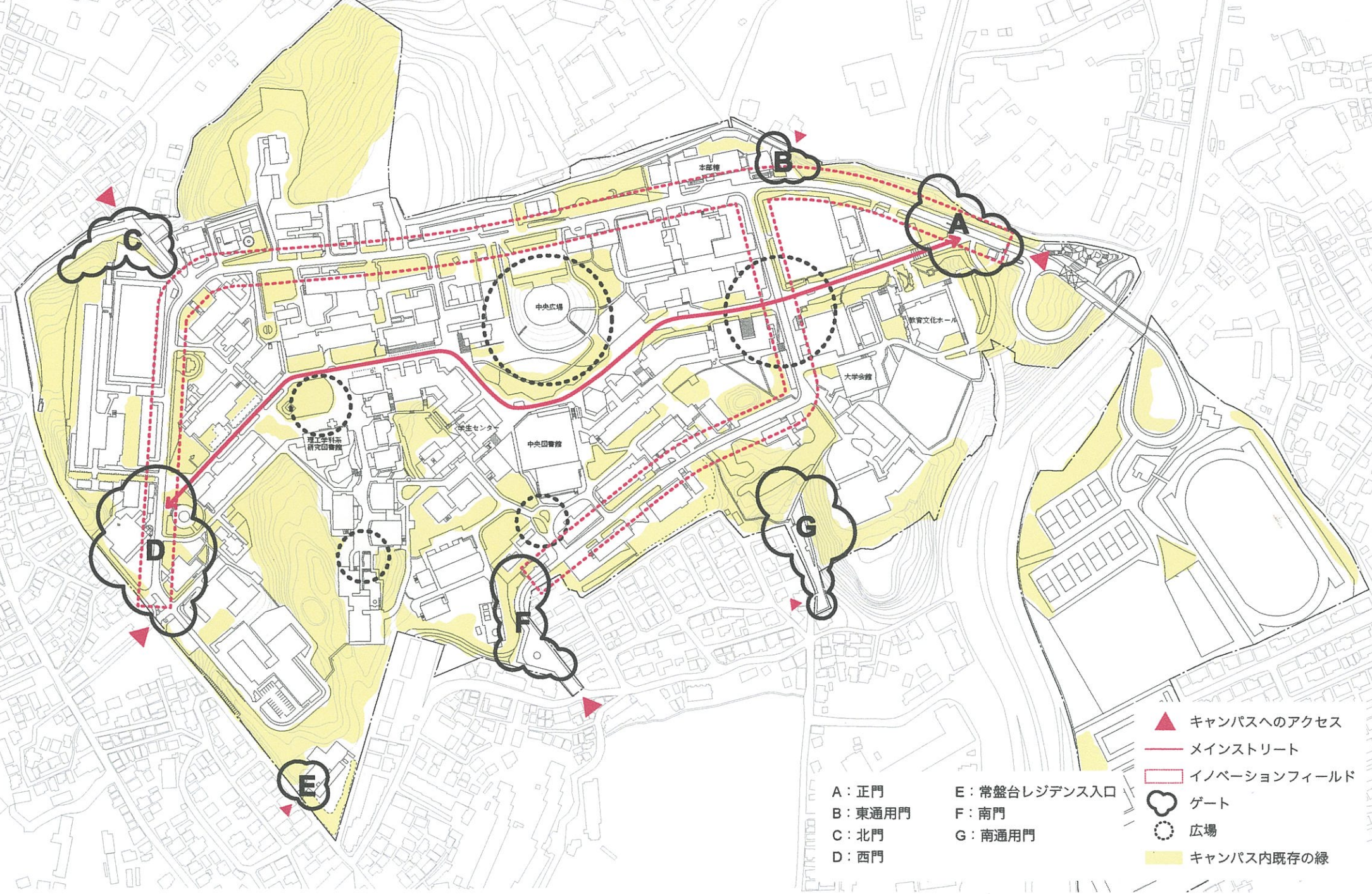
さまざまな活動の群れとしてのキャンパスへ
木々の成長によりキャンパスの領域性が自然と生まれ、境界を示す明確な象徴的建築物（主にゲート）は不要と考える。この点は他大学と比較し、横浜国大が持つ個性的な性格であると言える。

時間変化



同時期に計画した近代的キャンパス
当時のキャンパスは、機能主義的な建築配置計画が露出し、ゲートや塀とともに明確な境界性を必要とした。

■「緑と建築の連鎖とシークエンス」がキャンパスを経験する上でのアイデンティティになる



■「森とランドマーク」

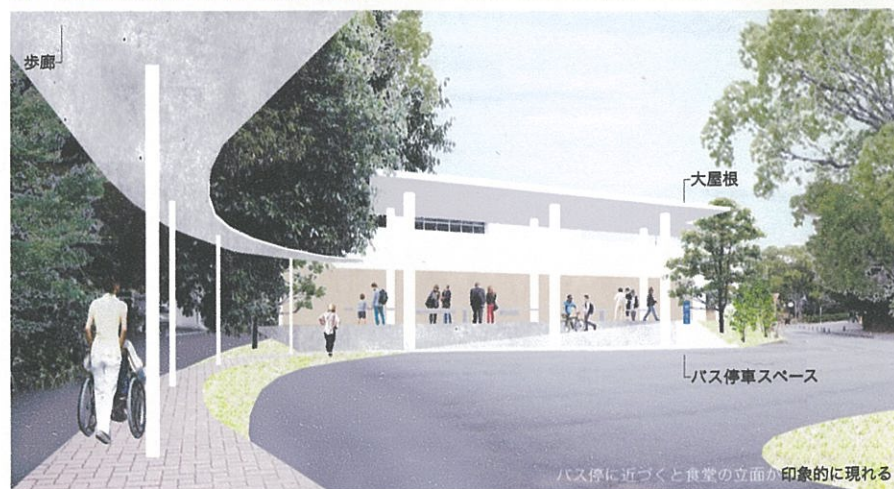
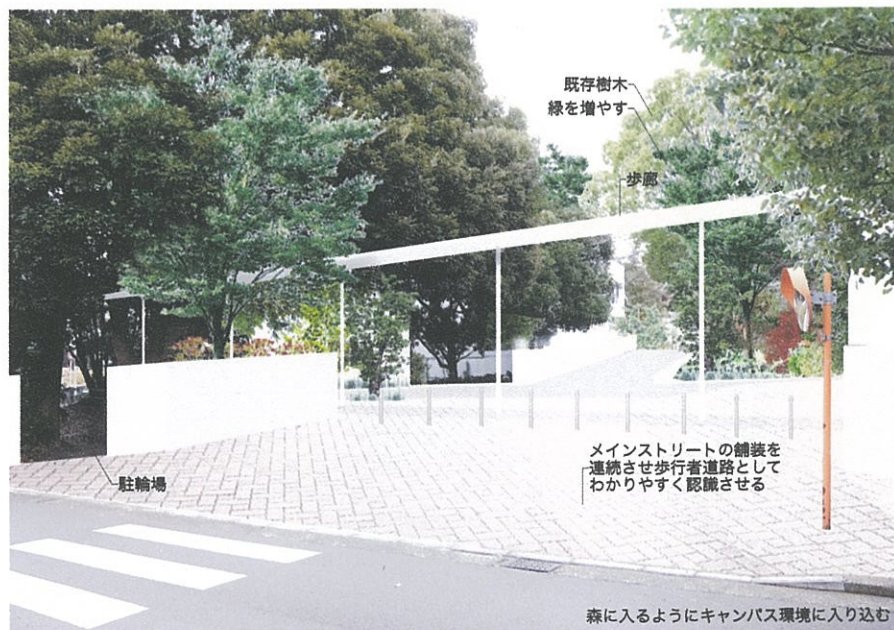
現状の常盤台キャンパスでは、緑と建築の連なりとシークエンスを散策しながら楽しむことができます。生茂る森により視界が遮られつつ、進んでゆくとインパクトのある建築（講義棟・研究棟等）が姿を現します。この繰り返しが、教職員や学生、来訪者にとってアイデンティティとなっています。



■「森の玄関口」

常盤台キャンパスには主に7カ所の入口が存在しますが、その一部は森を切り開き、森のイメージを妨げるような構造物が設えられており、幾分殺風景に感じられます。各入口の森を整理し、植樹を減らしたり増やしたりすることで調整してゆけると良いと考えます。本提案はその一環として西門付近について言及するものです。入口に対し、「森のなかへ入ってゆくイメージ」を強めることで、森が空間性を持ち、良好な環境づくりに貢献します。そのような「森の玄関口」を通過することで、キャンパス内のシークエンスと連続し、活発で豊かなキャンパス経験を予感させるものとなります。





■西門・バスロータリー一体に緑を増やす

